『西南アジア研究』No. 25, 1986

先・原史 Baluchistan の土器の検討
——ロクロ使用の開始を中心として——

鎌 田 博 子

I はじめに

ハラッパー文化[1]が盛期に達する前に，インダス平原と西の Baluchistan 丘陵には，初期農耕村落から町邑・都市段階に至る諸文化の発達があった。本稿はその中の Baluchistan の土器の「形づくり」をとりあげ，ロクロ使用の問題を中心に考察する。ここで「形づくり」と呼ぶのは，成形・整形・表面調整をあわせた工程のことである。従来の研究では欠落していた「形づくり」を基本にすえることで，諸文化の土器を整理し，ハラッパー文化の起源を論ずるひとつの前提としたい。

紀元前3千年紀までのインド亜大陸西北部の諸文化についてはさまざまな呼称がある。それぞれ，ハラッパー文化の起源論に対応して概念もまちまちである。Pre–Harappa culture, Proto–Harappa culture, Early Indus Civilization 等の語がある[2]が，筆者は諸文化に対して統一名称を与えることを避けたい。むしろ相異なる文化の併存状態を強調する立場から，土器を指標として大きく3つの文化に分ける[3]（図1）。

A Baluchistan 文化

1）最初の発見地名に由来する。狭義のインダス文明をさす。今日，Early Indus Civilization の語がコト=ディジ文化等の，ハラッパー文化よりも早く現れる文化の総称にも用いられているため，これと区別する意味でハラッパー文化の名称を用いる。

2）小西1981に用語と概念の諸例が整理されている。

3）インダス平原の諸文化の区分も，文化名称と同様に諸説分かれている〔小西1981〕。ここで用いる「インダス平原北部文化」は，Allchin のいう北方グループ〔ALLCHIN : 141—165〕とは異なる。

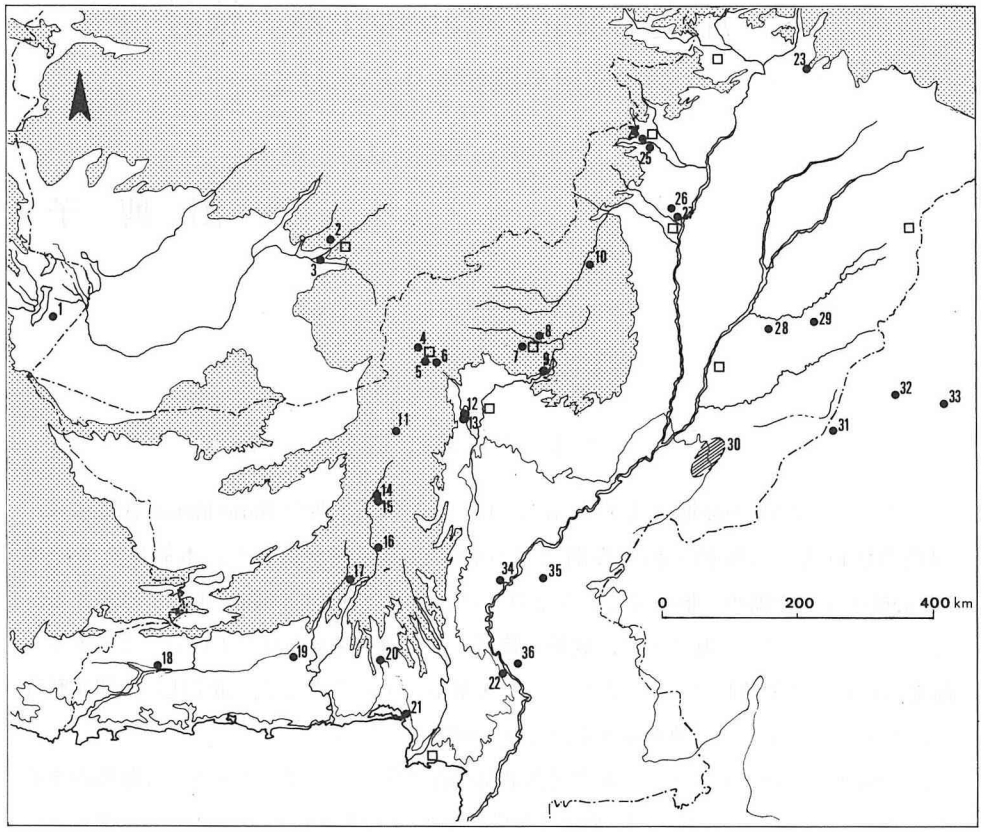


図1 Baluchistan と周辺文化の遺跡（6000～2500 B.C.）
（●は遺跡，□は現代都市）

1	Shahr–i Sokhta	2	Mundigak	3	Deh Morasi Ghundai	4	Kili Ghul Muhammad
5	Kechi Beg	6	Damb Sadaat	7	Sur Jangal	8	Rana Ghundai
9	Dabarkot	17	Periano Ghundai	11	Togau	12	Mehrgarh
13	Nausharo	14	Siah Damb	15	Anjira	16	Nal
17	Mehi	18	Shahi–Tump	19	Kulli	20	Edith Shahr
21	Balakoto	22	Amri	23	Sarai Khola	24	Lewan
25	Takarai Qila	26	Rahman Dheri	27	Gumla	28	Jalilpur
29	Harappa	30	Cholistan Group	31	RD 89	32	Kalibangan
33	Sothi	34	Mohenjo–daro	35	Kot Diji	36	Chanhu–daro

Baluchistan 丘陵を中心にして，周辺平野にも及ぶ。多様な彩文土器がある。近年発掘された Mehrgarh（以下 MR と略す）では，前 7 千年紀に遡る無土器新石器時代からの居住と文化的連続が確認された〔JARRIGE,J.–F. 1981，84，JARRIGE and LECHEVALLIER 1979，LECHEVALLIER and QUIVRON 1981〕。

B　インダス平原北部文化

Sarai Khola〔HALIM 1971〕，Jalilpur〔MUGHAL 1974〕,Gumla〔DANI 1971〕の最下層と Cholistan の99の地点〔MUGHAL 1982〕,インドのパキスタン国境に近い RD 89遺跡〔DALAL 1981〕で確認された。特殊なスリップがけの土器をもつ[4]。

C　コト=ディジ／ソティ文化

Kot Diji〔KHAN 1965，以下 KD と略す〕，Sothi〔THAPAR 1966〕を標準遺跡とする。前者はインダス平原の西側に，後者は東側に分布の中心がある。両者に共通の器形と文様をもつ土器があるが，内容は単純ではない。

インダス平原北部文化は，出土石器およびコト=ディジ文化層との層的連続から，前 4 千年紀前半から前 3 千年紀前半の間に位置する。MR Ⅵ 期には至らないであろう。コト=ディジ式土器は Amri での出土から MR Ⅳ期，すなわち前 4 千年紀後半に遡ると考える。これら 3 つの文化に，前期ハラッパー文化が加わる[5]。ハラッパー式土器の Amri での出土は MR Ⅴ期，すなわち前 3 千年期初頭に遡る（表 1 ）。

Ⅱ　研究史上の問題と視点

1.　研究史から

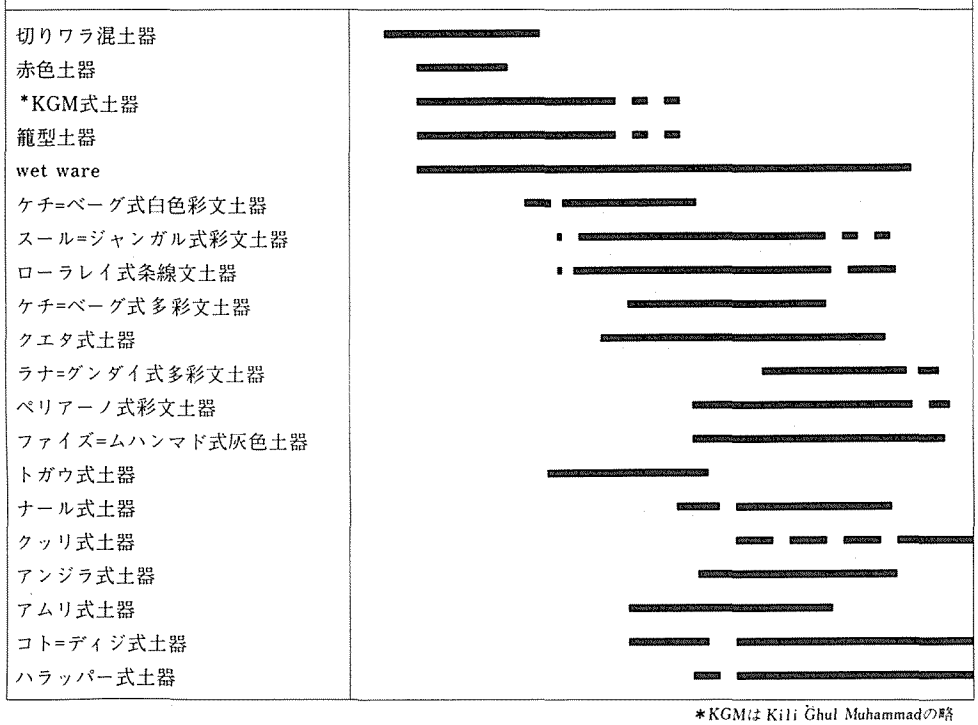
Baluchistan の土器研究の本格的なものは，Piggott が始めたといえる〔PIGGOTT 1943〕。以後の研究傾向は，多様な土器から種類を分離していく操作，イラン以西との比較可能な要素の抽出，それも文様に偏るところが大きかった。土器の分類は Fairservis によるものが詳しい〔FAIRSERVIS 1956 : 59〕。彼は Quetta および Zhob 河谷の土器

4）同じ器面処理が Amri の土器にもある。しかし，これだけをもって Amri 式土器が同じ文化の体系の中にあったとはいえない。

5）Machay 1938による Mohenjo–daro の分層に従う（Vol.I,xiv, Stratification)。Mackay は Mohenjo–daro を前・中・後・終末期の 4 時期に分けた。前期は Mackay と Dales〔DALES 1965〕による 2 つの小規模な試掘でしか，その内容が知られていない。しかし，同時期は KD, Amri，Chanhu–daro 等の Sind 地方の遺跡の多くに見出すことができる。

表1 Baluchistan と Indus 平原の遺跡および土器の編年表

		5000 4500 4000 3500 3000 2500 (B.C.)
Sur Jangal (Zhob V.)		Ⅰ Ⅱ Ⅲ
Anjira (Kalat)		Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
Quetta V.		*KGM Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Damb Sadaat Ⅰ Ⅱ Ⅲ
Mehrgarh		Ⅰ A B C D Ⅱ A B C Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ
Sind	Amri	Ⅰ a b c d Ⅱ a b Ⅲ a b
	Kot Diji	16～4 3A～1層
	Mohenjo-daro	前期 中期
Rahman Dheri		Ⅰ Ⅱ Ⅲ



*KGMは Kili Ghul Muhammadの略

を数十の種類[6]に分け，層毎の量的変化までを追求した。

土器の形づくりの技術研究は欠落に等しく，ちなみに報告書中の記載のほとんどは，“wheel made”と“hand made”で終わっており，用語の定義も不鮮明である[7]。日本においては“wheel made”は「ロクロ製」として紹介されてきた〔曽野1973他〕。筆者はこの点の実際を第一に検討する。ロクロ製の土器が最初に導入されたとする説〔DE CARDI 1965 : 101，112—117〕は MR の土器によって否定されたにしても，Kili Ghul Muhammad（以下 KGM と略す）Ⅱ層に遡らせることは依然行なわれている。

2.　観察資料と用語

観察資料は筆者が1983年にインドとパキスタンで実見したものであるが，図示したのは京都大学人文科学研究所所蔵品[8]（以下，人文資料と略す）と，パキスタン政府考古局調査部所蔵品(図 9)に限った。

以下，用語の説明を述べる。

“Wheel made” と “hand made”　ロクロ利用の有無による成形方法の違いを表わす〔世界考古学事典1979 : 781，土器製作法〕。前者をロクロ製と呼ぶ。後者は「ハンドメイド」〔佐原1972〕の訳例がある。手捏ね，粘土紐（帯）積上法，型起こし法といった個別の技法を確定できずに，便宜的に用いられているといえる。

ロクロ製とロクロの使用　Childe の定義する如く，遠心力を利用して粘土塊から土器の形を挽き上げるものがロクロ製と呼ぶにふさわしい〔CHILDE 1962 : 107〕。しかし，完成品から成形時の技法を断定するのは困難なので，本稿ではロクロの遠心力の利用のみに「ロクロ使用」の表現を用いる。

削り　土器がある程度乾燥した後に器壁を薄くし，整形する。削り面の状態を 3 種類に分ける。

a　1 回の削りがひとつの平滑面をつくる。

6）Fairservis はこれを“type”と呼ぶ。

7）“wheel made” の土器の見直しは，断片的にではあるが，Mughal の学位論文の中で行なわれた〔MUGHAL 1970 : 227—235，255等〕。また，J.-F. Jarrige は “some sort of rotating device” を“wheel” 以前に設定し，MR ⅡC 期をもって“wheel made pottery”の出現期としている〔JARRIGE 1981 : 101—103〕。後に1984で変えた時期区分名称のⅡC 期である。しかし，Jarrige の“wheel made”の根拠は明白ではない。

8）桑山1966に一部が図示された。整理箱で 5 箱ある。

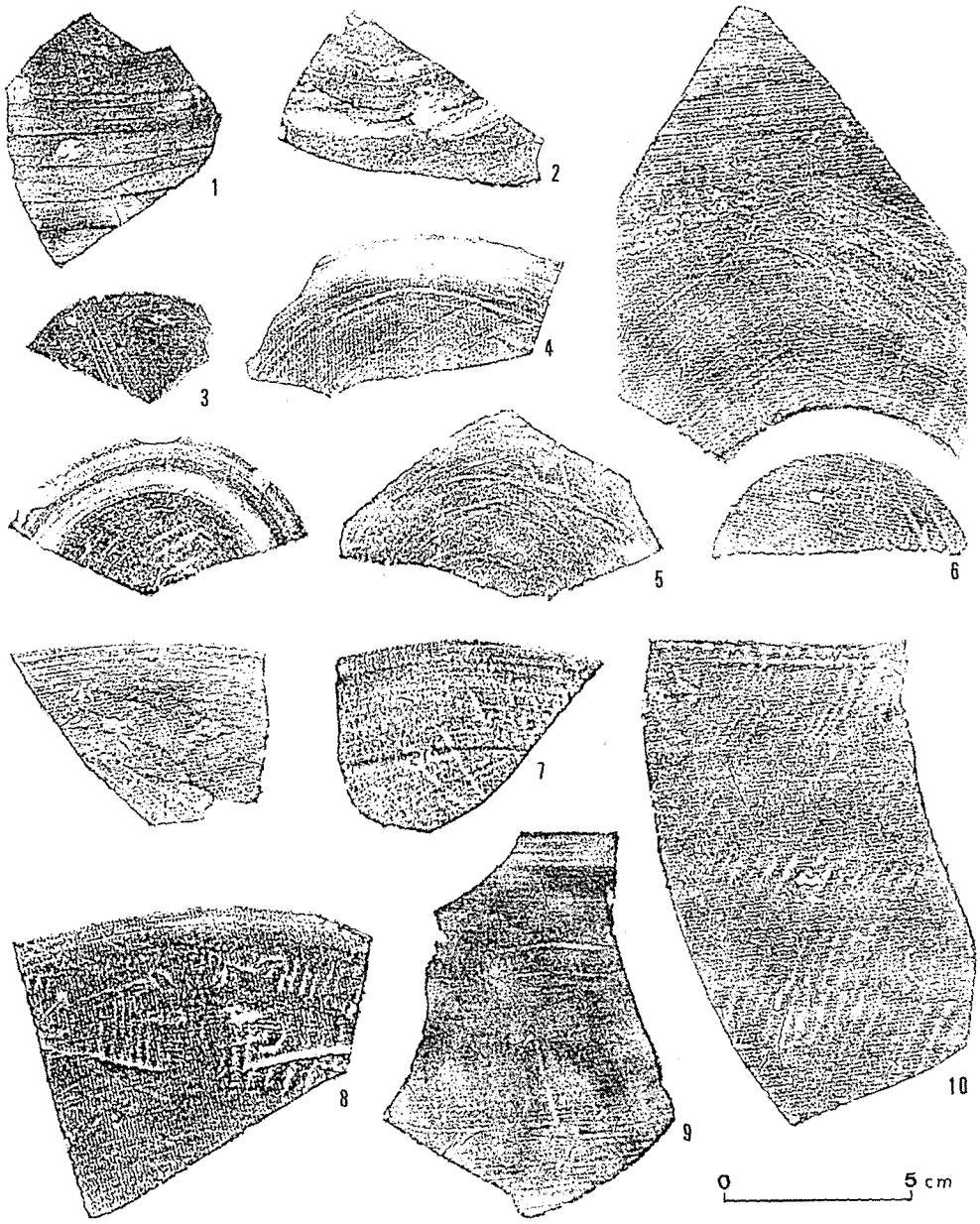


図2　Baluchistan の土器の表面調整痕拓影(1)(人文資料)

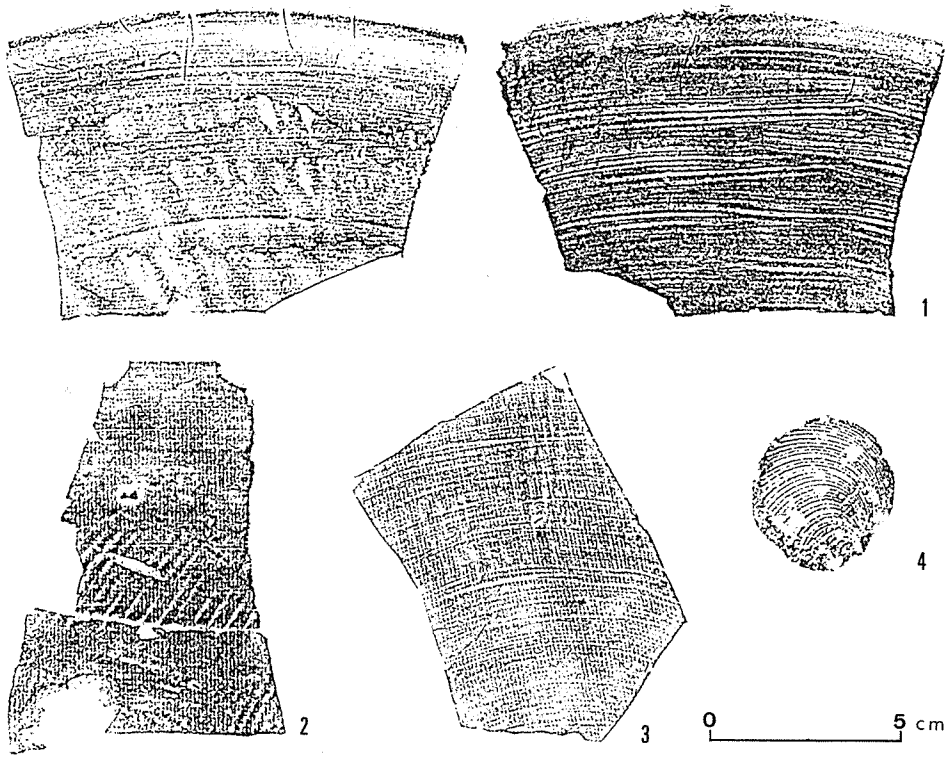


図3　Baluchistan の土器の表面調査痕拓影(2)(人文資料)

b　1回の削り面の中に，起伏の弱い凹凸面が連続し，横断面が波状になる。

c　1回の削り面の中に多数の凹線が連続する。

削りaは最も一般的であり，それのみで現れるほかに，削りbやcと連続したり，それらを削ったりしている。

削りbは専ら体部にあり，水平に施している。凸部と凸部の間隔は比較的広く，0.8～1㎝の例が多い（図3―1）。

削りcは，鋭く一方から切りこまれた凹線からごく浅く鈍いものまで，種々な凹線を生む。多くは，飛びガンナとか踊り篦とか呼ばれるものである〔原色陶器大辞典：145，713〕。中国陶器の飛白文のように意図的に装飾に用いる例もある〔世界陶磁全集第10巻〈中国宋遼篇〉：311〕。Baluchistan の例については宗臺秀明の指摘がある〔宗臺1982〕。彼は装飾性を強調したが，筆者は形づくりに伴うものが本来と考える。一般に，飛びガ

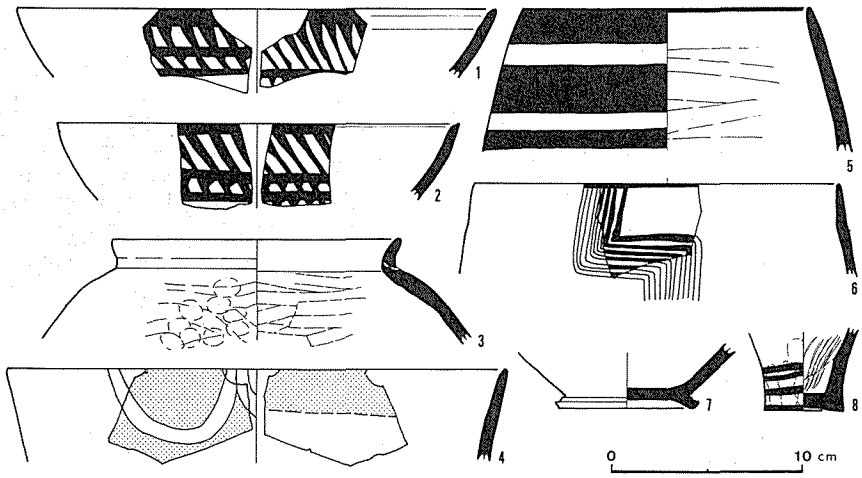


図4　Kili Ghul Muhammad 表面採集の土器(人文資料)

ンナはロクロの回転に伴う遠心力と，削り工具との反撥の操り返しの結果として現れるので，当然ロクロ使用と結びつけられる。しかし Baluchistan の土器では体部の縦や斜め方向の削り[9]，底面の削りにも削りcがある。これらはロクロ使用とは結びつけられない。

条痕調整　粘土が湿っている時に施す表面調整で，幅1.5～2.5cmの板状具によるかき撫でである。日本の土器のハケ目調整に近い。人文資料の1例（図3—1，図6—28）は粗い条線をもつが，他は細かく浅い条となる。ほとんどは土器の内面調整に用いる[10]。調整方向は横であるが，やや斜めもしくは弧状をなし土器を1周する間に何度も止まって傾きを変える。手持ちか回転台を利用して土器を回しながら調整したものであろう。

Ⅲ　形づくりにみる土器の変遷

1.　MR Ⅱ A—Ⅱ B 期

Ⅱ A 期の土器には切りワラを多量に混ぜる。表面には指の圧痕があり，撫でて仕上げる。焼成温度は底く，暗褐色の芯がある。浅い皿と半球状の鉢とがある。Ⅱ B 期には雲

9）J.-F. Jarrige は，MR の概報で斜めの削りについて述べている〔JARRIGE 1981 : 101〕。

10）コト=ディジ式土器とアムリ式土器には外面に条痕調整を施す例がある。

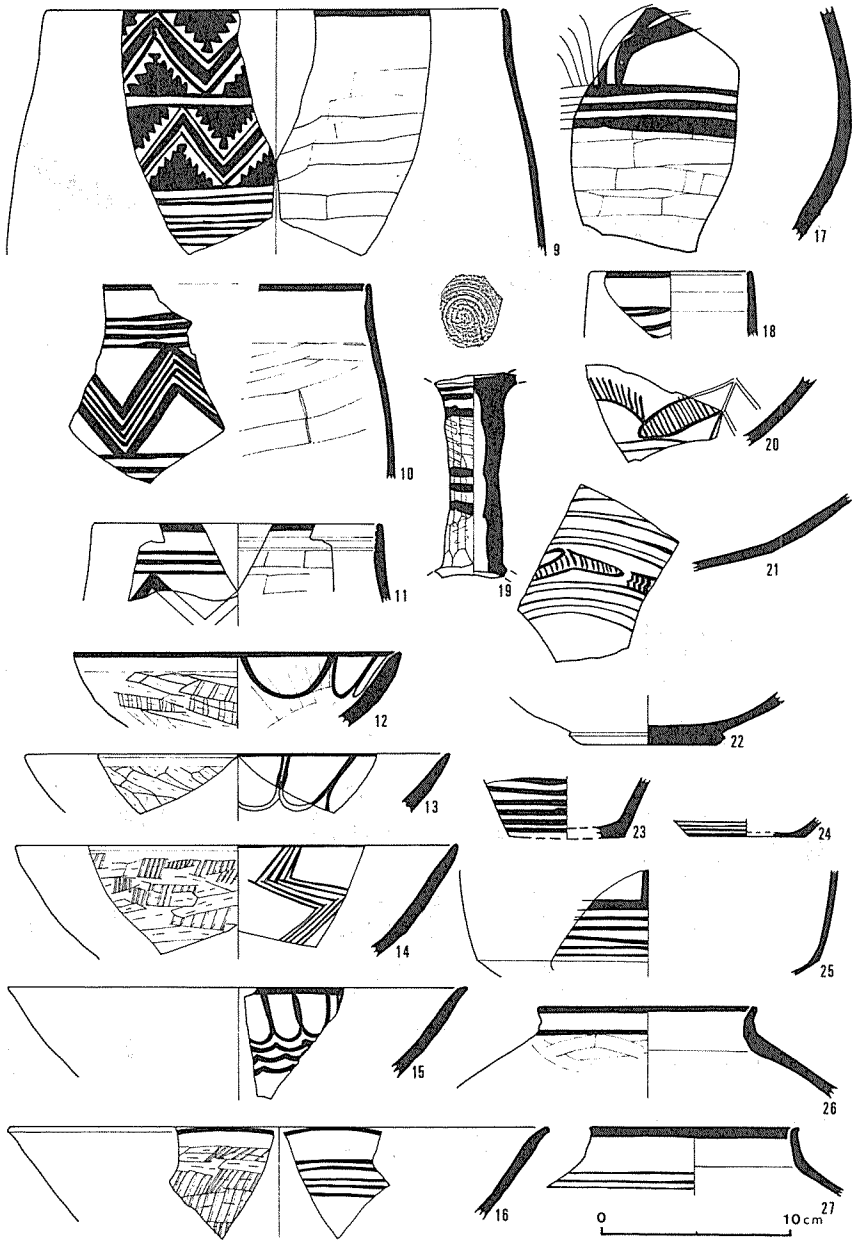


図5　Damb Sadaat 表面採集の土器(人文資料)

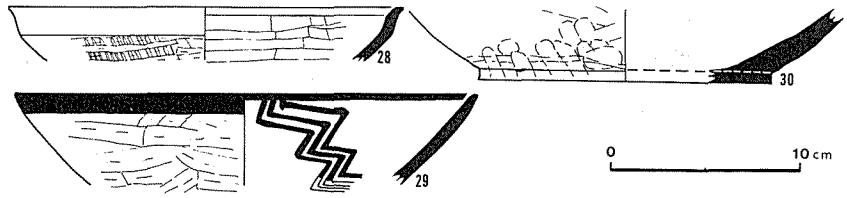


図6　Damb Sadaat および Kechi Beg の表面採集の土器(人文資料)

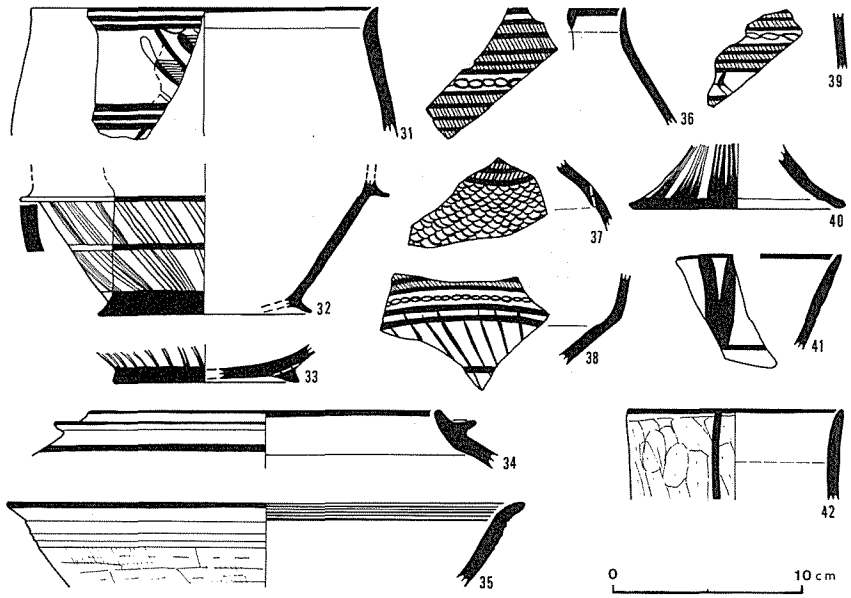


図7　Sur Jangal 表面採集の土器(人文資料)

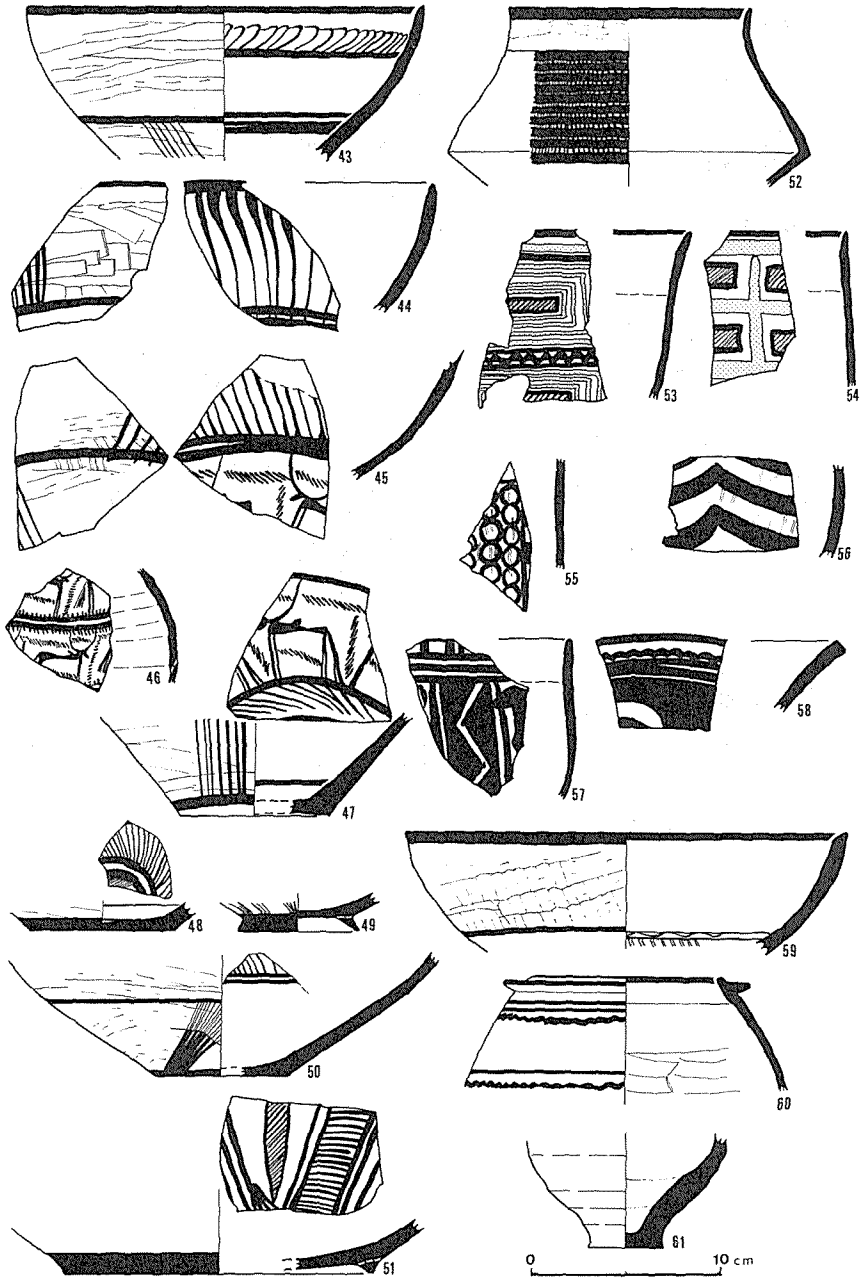


図 8　Rana Ghundai 表面採集の土器(人文資料)

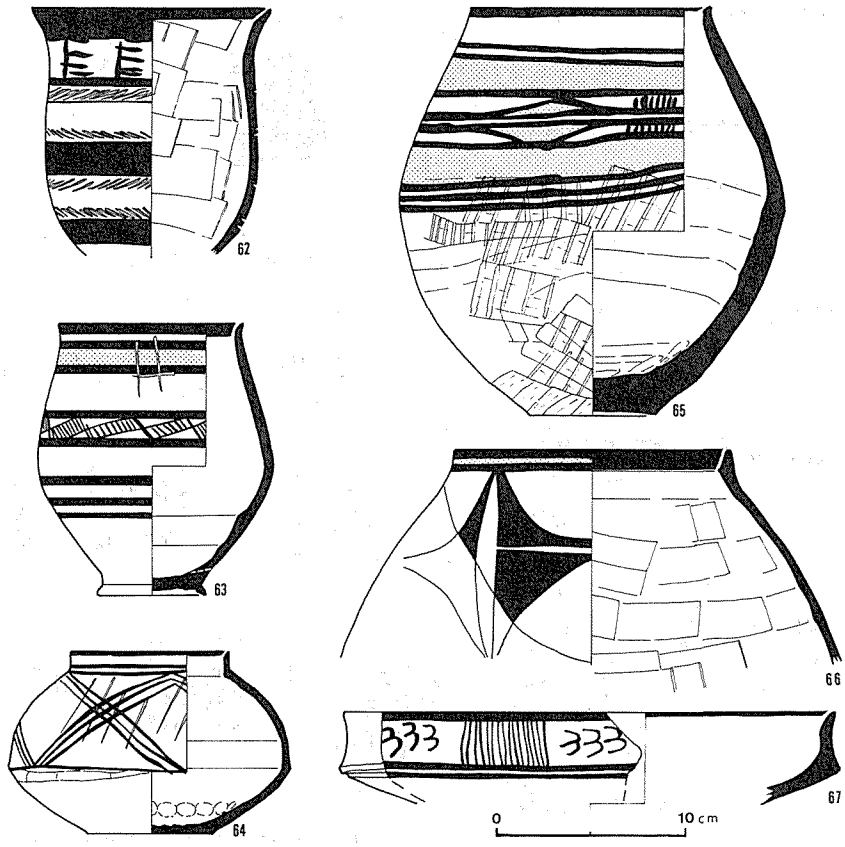


図9 Amri 出土の土器(パキスタン政府考古局調査部所蔵品)

母を混ぜた薄手の赤色土器が現れる。磨きの例がある。中・小型の丸底壺が確認された。ⅡA 期・ⅡB 期とも土器の絶対数はごく少ない[11]。MR 以外ではまだ類例の出土が知られてない[12]。

2. MR ⅡC—Ⅲ期

ⅡC 期は過渡期として新たに設定された〔JARRIGE, J.-F. 1984〕。この時期に現れる土器は，以後の Baluchistan の土器の基本となる。細砂を少量混ぜた鈍黄色の土器で，

---

11) ⅡA 期では12片，ⅡB 期の重なる2層では，225m²から220片が出土した。

12) J.-F. Jarrige は MR における土器出現期の様相を Teppeh Sang–e çaxmaq〔MASUDA 1974, 増田1977〕と比較している。

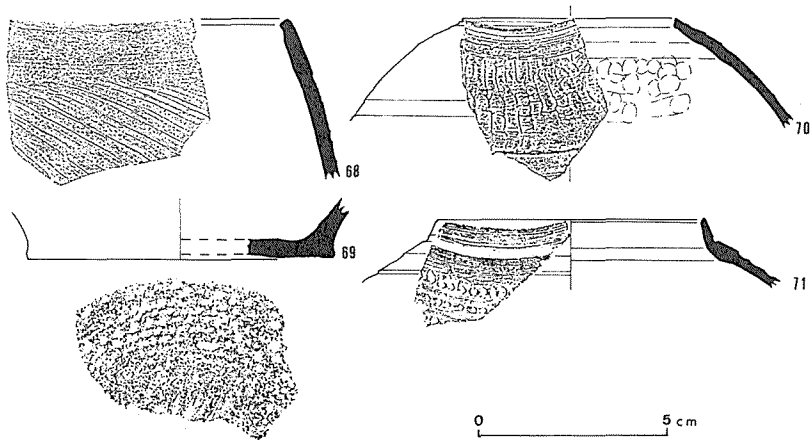


図10　Wet ware と篭型土器(人文資料)

焼き上がりは硬い。口の開いた浅鉢と中型の球状壺があり，スリップや単純な彩文も施される。篭型土器[13](図10—69)も続いて現れる。ⅡC 期ではこれらの土器がⅡB 期までの土器と数量的に次第に置き換わる。Ⅲ期には "wet ware"[14](図10—68, 70, 71)と深鉢とが加わって，器種構成が整う。

MR ⅡC 期には混和材，焼成温度，器形の変革があるが，同時に形づくりの技術も変化し，後へと続く特徴が現れる。鈍黄色土器は Quetta 河谷や Kalat でキリ=グール=ムハンマド式赤地黒彩文土器と呼ばれたものである〔DE CARDI 1965, FAIRSERVIS

13) 篭の中で粘土紐を積み上げていって作った土器と考えられる。篭目を体部外面全体に残す品と，体部で篭目を撫で消す品とがある〔FAIRSERVIS 1956 : 259, Pl. 35〕。

14) "wet ware"の名で呼ばれる土器は，いずれも外表に故意に凹凸をつける。技法的には単純ではない。以下に主たるものをあげる。1) 指圧痕を全面に施す。成形の際の圧痕をそのまま残したものと考えうるものが古い。ついで，厚くかけたスリップを横に規則的に押圧する土器が現れる。2) スリップを横・斜めに撫でる。3) 厚いスリップが泥状の時には指等で押え，網状の凹凸を作る。4) 板状具か棒状具の側面を器表に押しつけ，斜めの沈線を作る。5) 土器を回しつつ横から削った沈線を施す。沈線は孤状をなす。6) 円形の刺突文。

"wet ware"の語は Fairservis が用い始めた〔FAIRSERVIS 1956 : 268—70〕。しかし，技法的にも時期的にも細分が可能であり，6)は除くべきである。MR Ⅲ期には1)があり，この段階では厚く大型の粗製土器である。5)は最も装飾的でかつ遅い時期のものである。

1956 : 256—527〕。

MR ⅡC—Ⅲ期の土器においては，ロクロの使用は認められない。回転台利用程度である。MR Ⅲ期は KGM Ⅲ期に併行し，同時期にはトガウ式土器（A 段階）〔DE CARDI 1965〕，ローラレイ稿文土器[15]〔FAIRSERVIS 1959 : 368—9〕，スール=ジャンガル式彩文土器[16]〔FAIRSERVIS 1959 : 365—7〕等がある。

3. 人文資料にみる MR Ⅲ期以降の土器

MR Ⅲ期以降の遺跡は Baluchistan 全域に広がり，年代が進むにつれて地域色もでてくる。しかし，土器の基本的性格は同じである。次には，形づくりを人文資料によって具体的にみていこう。

ⅰ)土器 3 ～ 5（図 4 。以下説明文中の番号は，実測図の土器番号を示す）

3 は種類不明。4 はケチ=ベーグ式白色彩文土器〔FAIRSERVIS 1956 : 257— 9〕。5 はミアン=グンダイ式暗色口縁土器〔同上 : 266〕。これらの土器は内外に指圧痕と撫で調整をもつ。時期は KGM Ⅳ期と Damb Sadaat（以下 DS と略す）Ⅰ期，すなわち MR Ⅲ・Ⅳ期に限られる。古い時期の特徴のひとつを示している。

ⅱ)スール=ジャンガル式彩文土器[16]

この土器は Sur Jangal（以下 SJ と略す）Ⅰ期上層に現れ，Ⅱ期に多い〔FAIRSEARVIS 1959 : 365〕。MR Ⅲ・Ⅳ期に相当する。人文資料には壺と鉢があり，それぞれは器形からさらに 2 分できる。

壺 A　肩の丸い小型壺。46（図 2 — 1，図 8）は内面を横に撫でて，外面を削る。37（図 2 — 2，図 7）は内面に粘土の継ぎ目が残る。内面は粗く削る。外面は斜め・横の削り。

壺 B　ふくらんだ体部からゆるやかに口縁へとすぼまる。36（図 7）は内外横撫で。

鉢 A　体部半ばで屈曲し口縁まで直立に近く立ち上がる。屈曲部に突帯をもつものがある。32（図 7）は内面を横に撫で，外面を横に削る。31・38（図 7）は内外とも横に撫でる。底部資料の33（図 7，図 2 — 5）と49（図 8）は，この器種に属するものであろう。内面は多くの切り合い，重なる弧線を残す条痕調整。底面は数方向に削り，高

15）Laralai Striped。下に向かって細くなる斜線文を特徴とする。

16）Jangal Painted および Jangal Coarse Painted を一括する。胎土の違いがある。ここでスール=ジャンガル式と呼ぶのは，Jhangar Pottery〔MACKAY 1943 : 132—135〕との日本語読みにおける混同を避けるためである。

台を貼り付けて撫でる。

鉢 B　体部が半球状の鉢（図８—43～45）。内面の調整には条痕調整と撫でとがあり，外面は横・斜めに削る。底部は47（図８），48（図２—３，図８），50（図２—６，図８），51（図２—４，図８）であろう。50は体部の１周を７回程度で削り，底は多角形状になっている。底部の内外の仕上げは33と同じだが，高台は付けない。

スール=ジャンガル式土器体部下半の，顕著に傾く削りと，中心の定まらない条痕調整とは，MR Ⅱ C・Ⅲ期の土器に共通するものである。削り c が多くの土器にあることも共通する。

ⅲ）クエタ式土器[17]

この土器は Damb Sadaat（以下 DS と略す）Ⅰ期上層に出現し，Ⅱ・Ⅲ期に盛行する。MR Ⅴ期以降に相当する。人文資料では浅鉢・深鉢・台付鉢・コップ形土器等を確認した。壺でこの種類に限定しえたものはないが，種類不明としたものの中にはそれと考えうる土器がある。

浅鉢　土器12～16（図５），29（図６）。内外の調整は比較的斉一である。内面調整は12（図２—７）で弧状の条痕調整があり，工具の止めを観察できる。その他の土器では横に撫でる。外面調整は15の撫でを除き，削り a か c である。12（図２—７），13，14（図２—８）では１回の削り幅が狭く，大きく斜めに傾く。外表面の仕上げは粗い。16では削り c の凹線は浅く密であり，削りの方向は水平に近い。

深鉢　土器６，９，10，17（図４—６）。調整は個々の相違が大きい。

６は内面を横に撫で，外面は斜めに粗く削る。

９は内面が斜め・弧状の条痕調整。外面（図２—９）は水平に近い削り c。内面調整は10（図２—９）に似る。17は内面が横の撫で，外面が水平な削り。

台付鉢　土器19（図５）。脚部は中空で内面は不規則な凹凸面をなす。外面は縦の削り c。鉢部の内底面には同心円をなす撫でがある。ロクロによる調整であろう。

コップ形土器　土器11，18（図５）。内外の調整痕，特に凹面の重なりは，ロクロ調整を思わせる。

底部　土器７（図４）。底面はヘラで切ったものと思うが，Ⅴ字状のヘラ記号を施した後に厚くスリップをかけており，調整痕の観察は困難である。高台は貼り付ける。

17）クエタ式土器の分離は Piggott 1947の中で行なわれた。Fairservis はクエタ式鈍黄色地黒彩土器（Quetta Blacke on Buff）と呼んだ。

クエタ式土器については，ロクロ使用の有無を含め，器種による調整の違いがあるといえる。

Ⅳ)ファイズ=ムハンマド式灰色土器

いくつかの亜種を伴うが〔FAIRSERVIS 1956 : 326—7〕ここでは一括する。還元炎焼成により灰色を呈する。MR Ⅴ—Ⅶ期に相当する。

20(図5)，21(図3—3，図5)は皿。20は内外横削りの後，横に撫でる。21は外面が水平な削りaとcで，クエタ式土器に往々みられる削りに伴う稜は，一ケ所にしかない。内面は横に撫でる。

Ⅴ)その他の土器

53(図3—2，図8)のラナ=グンダイ式多彩文土器〔FAIRSERVIS 1959 : 369〕，62，63，65，66のアムリ式土器〔WHEELER 1953，CASAL 1964〕，その他多くに，スール=ジャンガル式彩文土器と同じ調整を認めうる。一部にはクエタ式土器程度に削りが水平に整うものがあるが，ここでは省略する。28(図3—1，図6)のミアン=グンダイ式精製無文土器〔FAIRSERVIS 1959 : 376〕に類似する土器と，56(図8)のペリアーノ式彩文土器〔FAIRSERVIS 1959 : 367〕とには，削りbがある。削りbは遅い時期の特徴であろう。人文資料では例が少ない。

30(図6)は底に体部の粘土を積んでいるのが観察できる。48のスール=ジャンガル式彩文土器の壺と共に，粘土紐積上げによる第一次成形を明白に示す例である。

これら人文資料からは，先・原史 Baluchistan の土器に一定の技法的共通性と時間的変化とがあることがわかる。形づくりに際しては粘土紐の積み上げで第一次成形を行ない，ついで内面を条痕調整や撫でによって仕上げる。そして半乾燥の後に外面を削りによって仕上げる。削りを用いぬ土器では，撫で調整が専らである。

外面の削りはスール=ジャンガル式彩文土器→クエタ式土器→ファイズ=ムハンマド式灰色土器の順で，より水平に整っていく。この順は土器の出現年代と一致する。

さて，クエタ式土器においては浅鉢外面の削りは手持ちのものが多く，水平に整う削りは深鉢の特徴である。それがファイズ=ムハンマド式灰色土器では，皿の外面で極めて水平に整った削りをみる。クエタ式土器以降にはロクロといえる装置の使用があり，さらに技術発達があったと想定できる。人文資料ではファイズ=ムハンマド式灰色土器は少なく，ロクロ技術の発達した例を充分に語れない。また表面採集資料という限界がある。そこで，次に MR の資料で発達例をみていく。

4.　MR Ⅵ・Ⅶ期の土器の形づくり

MR の資料で発表されたものは少ない。ここではまず，Jarrige,J.-F. とLechevallier,M. 著の "Excavations at Mehrgarh, Baluchistan",*SAA* 1977に実測図や写真が示されたものについて，筆者の観察を述べ，ついで全体について述べたい。

Fig. 24—5はⅥ期の台付鉢。鉢部に魚を描く。還元炎焼成で灰色を呈する[18]。鉢の内面には，らせん形の調整痕がある。内外とも口縁近くに削りｃの凹線が浅く残る。台の裾部は削って仕上げる。鉢の体部へと立ち上がる部分や体部中位近くには粘土紐の継ぎ目と考えられる部分があり，体部上半の調整は処々で止まる。ロクロによる整形と調整を行なうが，基本的成形は粘土紐積上げによるものであろう。

Fig. 34—８はⅦ期のコップ形土器。灰緑色。外面全体は削りｃで，削りに伴う凹線は体部上半では右傾と左傾とが上下に重なり，下半では縦になっている。内面は撫で。

Fig. 36はチューリップ形ゴブレット。灰色。２段の水平な文様帯に山羊を描く。外面の上部に削りｃがある。底面には同心円の条が残る。回転を利用して削っている。内面は横の撫で。

Fig. 37は浅い皿。灰色。内面には魚を２段に描き，間に植物を配する。粘土を円盤状にした底の上に，体部の粘土を積み上げる。底面は Fig. 36と同じ。体部は外面全体を水平に削る。凹線の傾きは右傾・左傾が上下方向で交互に代わる。削りｃの凹線の傾きは，人文資料では大半が右傾，まれに縦である。右傾・左傾が交互に段をなすのは MR Ⅳ期以降の，この遺跡の土器に多い特徴といえよう。Fig. 37の内面は自然釉のために調整の観察は困難である。

MR Ⅵ・Ⅶ期では台付の器種が多いが，平底の場合の底面の仕上げ方法には３種類ある。Fig. 34—８のように数方向に削る従前と同じ技法のもの，同心円の条を残す回転利用のもの，回転糸切痕をもつもの，の３種である。内面の撫ではロクロを用いており，平行な細条やらせん痕を残す。外面調整には削りが多く，上記の観察例のほか，小型品では高台を削りで整形しているのが注目できる。

MR Ⅵ期以降には鈍黄色土器と灰色土器とがあり，灰色土器の方が概してロクロ使用の多い精巧な土器を多く含む。しかし，法量の大小とロクロの使用方法とは関連せぬようである。

18）ファイズ=ムハンマド式灰色土器と同じく硬質のものであり，焼成等も同じであるが，Quetta 河谷では知られていない器種や文様が MR に多い。

MR Ⅵ・Ⅶ期では成形の最初からロクロを用いた証拠はないが，部分的成形と整形の削り，表面調整では，かなりロクロを使用していたと考える。

MR Ⅵ期以降には形づくり以外にも土器の変化が多いので，最後に列挙しておく。

ⅰ)還元炎焼成の完成。Ⅴ期からの発達が指摘された[19]。

ⅱ)新たな器種。チューリップ形ゴブレット，ビーカー形鉢，多様な台付土器，皿があり，全体に滑らかな曲線をもつ小型の器種が増加する。

ⅲ)動植物文の盛行。Ⅴ期から文様要素としての植物があるが，動物文を組み合わせた構成が現れ，幅広い文様帯をつくるようになるのはⅥ期である。

5. MR Ⅵ期以降の他の土器

この時期には，新たにナール式土器〔HARGREAVES 1929, WHEELER 1953〕が Baluchistan 南部に，ついでクッリ式土器〔STEIN1931, WHEELER 1953〕が西南部 Makran 地方に現れる[20]。両者とも文様は独特であり，いくつかの器種は全く新しい形態をもつ。特に壺の形は特徴的である。ナール式土器の，体部が円筒状の "Canister Jar" と鉢，扁平で体部半ばに稜をもつ壺，クッリ式土器の肩の張った，あるいは肩に稜をもつ壺は，従前の Baluchistan の球状の壺とは全く異なる。

ナール式土器においては外面の削りにロクロが用いられ，厚さ0.2cm程度の極めて薄い土器も作られた。クッリ式土器ではロクロが成形に用いられた。内壁には水平な凹凸面の重なりがあり，器壁は比較的厚い。この2者には深鉢が認められない。これは MR も同じである。

クエタ式土器では小型器種が多い。

---

19) 彩文の色が黒にならず，赤色のものが，Ⅴ期にある〔JARRIGE and LECHEVALLIER 1979 : 500—501〕。ファイズ=ムハンマド式土器の亜種3も，彩文は赤色を呈する〔FAIRSERVIS 1956 : 263, variant 3〕。

20) クッリ文化の標準遺跡 Kulli は，Stein の簡単な調査が行なわれただけであり，比較層位の資料としては不充分である。最近の Nindowari の発掘では，下層にナール式土器と DS Ⅲ期のクエタ式土器，中層にクッリ式土器，上層にクッリ式土器とハラッパー文明の遺物があるとわかった〔CASAL 1966, JARRIGE 1984〕。または Balakot ではⅠ期にナール式土器があり，Ⅱ期のハラッパー文化層中にクッリ文化の遺物が出土した〔DALES 1979〕。これらの遺跡からは，ナール式土器→クッリ式土器→ハラッパー式土器の順が一見追えそうであるが，年代は MR Ⅴ期から中期ハラッパー文化までに渡る。単純な編年はできない。

還元炎焼成の土器は Nal や，クッリ文化の遺跡の出土品にある[21]。Kalat のトガウ式土器の最終段階，黒色スリップのアンジラ式土器も還元炎焼成と関連しょう〔DE CARDI 1956〕。

動植物文は多くの土器に現れるが，とりわけクッリ式土器の文様は MR と比較しうる構成と写実性をもつ。動物のみ，あるいは植物のみを大きく描く例はクエタ式土器，アムリ式土器，ナール式土器，ヌンダラ式土器[22]にある。Rahman Dheri〔DURRANI 1981〕や Lewan〔ALLCHIN and KNOX 1981, ALLCHIN 1982 : Fig. 6—32〕のようなインダス平原西縁部の遺跡の土器[23]，およびハラッパー式土器においても動植物文は大きな特徴となっている[24]。

Ⅳ　Baluchistan 周辺地域の土器の形づくり

1.　インダス平原北部文化の土器

器壁は厚く，焼成温度は比較的低い。暗—明褐色を呈する。器種は，頸部がすぼまり口縁が大きく外に開く壺，無頸壺，中・小型鉢である。表面調整は撫でと磨き，および土器の細片を混ぜたスリップがけとである。この土器では口縁端部を指で押えて波状にするものや，鉢底部に編み物の痕を残すものが特徴である。おそらく粘土紐積上げ法で成形したものであろう。彩文例はない。

2.　コト=ディジ／ソティ式土器

コト=ディジ式土器は微細砂の混じる黄褐色から赤褐色の堅牢な土器である。球状胴部をもつ短頸壺，体部に屈曲部をもつ浅鉢が早くからあり，ついで口縁部の外側に鍔状の突帯をもつ壺，台付壺，コップ等の小型器種が現れる。装飾は頸部を帯状に塗る単純なもので，KD 上層では単純な幾何学文と有角の動物，もしくは「神像」の例がある。平底の底面は，筆者の実見範囲では回転糸切底をもつが，数多くをあたってはいない。

21）一定の器種と文様はナール式土器として認められているが，「ナール文化」と呼びうるアセンブリッジは確立されていない。クッリ文化も同様である。

22）Piggott 1950 : Fig. 2，4。Piggott は Nal–Nundara Culture をあげてナール式土器とヌンダラ式土器を一括し，かつアムリ式土器との共通性をあげた。

23）これらの遺跡はコト=ディジ文化に関連する。

24）ハラッパー式土器の文様については別の機会に著わしたい。クジャク，ピッパル，太陽，魚が主たるものである。

KDの報告書の図からは，上層にロクロ使用と結びつけうる例がいくつかある[25]。壺では内面の撫でと体部下半の削りが一般的特徴である。削りcは少ない。Baluchistanの土器の多くのように口縁部までの外面全体に削りを施すことは，一般的といえない。コト=ディジ式土器においてはロクロ上での調整と部分的成形が想定できる。

ソティ式土器はKalibangan〔*IA* 1962—63，1965，LAL 1979他〕の資料でみる限り，一部にロクロの使用がある。

3. 前期ハラッパー式土器

胎土はコト=ディジ式土器よりも砂っぽい。また器壁は概して厚い。胎色は赤褐色を呈し，スリップは濃赤褐色か黄白色を主とする[26]。彩文土器の割合はごく小さい。ロクロによる部分的成形と調整は，大半の土器で行なわれた。Mackayは*Mohenjo-daro and the Indus Civilization*の土器の章で，回転糸切痕やロクロ上での仕上げに言及している〔MARSHALL 1931 : 287—90[27]〕。小型器種の底部内面の斜めに走るしぼり痕からは，成形にもロクロを用いたと考える[28]。削りは厚く作った下半部の整形に多く用いられ，削りb・cは少ない。

4. Shahr-i Sokhta Ⅰ—Ⅲ期の土器

東イランのShahr-i Sokhta（以下S-iSと略す）Ⅰ期は，原エラム文化の遺物が出土しており，メソポタミアのJamdat Nasr期に遡る。Ⅱ—Ⅲ期は初期王朝期に相当する。ここでは，同じように原エラム文化の拡大に伴う都市である，Tepe Yahya〔LAMBERG-KARLOVSKY 1979，1973，1978，1982，LAMBERG-KARLOVSKY and TOSI 1973〕等と異なり，メソポタミアの土器はほとんど導入されなかった。この地の土器は南トゥルクメニアのНамазга文化〔MASSON and SARIANIDI 1972 : Массон 1981〕の影響の強い，固有のものである。彩文土器の文様はクエタ式土器やファイズ=ムハンマド式灰色土器，アフガニスタンのMundigak〔CASAL 1961〕，南イランの

25）BⅣ—6区第8層出土の土器内面にある凹面の重なり，同区第7層の台付鉢内面のらせん形の沈線。

26）彩文土器では濃赤色のスリップが多い。ほかに白色やピンク，暗褐色のスリップがあり，2色の組み合わせもある。

27）Mackayのロクロについての考察は，エジプトやメソポタミア，イランに及び，かつ民俗例への知見をも背景としている〔MACKAY 1930〕。

28）Wheeler 1968 : 94での記述からは，Tosi 1969でハラッパー式土器におけるロクロ使用を後期とした典拠をWheelerにおくことに，疑念をもたざるを得ぬ。

Bampur〔DE CARDI 1970〕等の土器と関連する。土器には還元炎焼成で焼かれた灰色土器[29]と鈍黄色土器とがある。Tosi によると，“fast wheel” はなく，“turn table” を想定できる。鈍黄色土器の大型品は粘土紐の巻き上げか輪積み，小型品には手捏ねのものと “turn table” が使用されたものがある〔TOSI 1969 : 314—5〕。これらについては報告書中に写真が示されている。S–iS の土器については分析が続行されているが，最近 Vidal は鈍黄色土器の中でも特に規格性の強い小型器種の，梨形ビーカー（Pear–shaped Beaker）の形態的変化を論じた〔VIDAL 1984〕。この中では，形態的変化とロクロ技術の発達とを関連づけているのが注目できる。ロクロの発達についていえば，Ⅰ期の終わりには “fast rotating device” が用いられ，Ⅱ期には円筒形にした粘土をロクロ上にのせ，2次的成形[30]と下部の削りとを行なうようになる。Ⅲ期には削りがなくなり，粘土塊からの成形が想定された。

5.　Mundigak の土器

アフガニスタン南部の Mundigak の土器は，MR Ⅱ C 期以降の土器と極めて近いものである。Kiefer による形づくりの研究[31]は，筆者の Baluchistan の土器の観察結果と重なる所が多い。つまり，土器の大まかな形をつくり（ébauche，あらづくり），内面の形を仕上げる。ついで乾燥させ，外面を回転を利用した削りによって薄くする（fasonnées au tour）というものである。

Baluchistan と周辺地域の土器を比較整理すると，次のことがいえよう。

（1）形づくりの技術において，Baluchistan は東イランや南アフガニスタンと基本的に同じところがある。粘土紐積上法による成形と，回転台からロクロへの漸進的な発達である。この間の各地域の土器作りは，文様で密な関連はあっても，形づくりについて

29）この灰色土器は軟質で，外表的にハケ目とよく似た比較的上下に長い調整がみられる〔TOSI 1969, Fig. 111, 112〕。

30）“collaring” とある。一次成形としては手程ねで円筒形を作り，ロクロ上で頸部をしぼり，口縁までの形を作ったとする解釈である。“collaring” はしぼりを意味する語であろう。他に “necking in”〔DICKERSON 1974 : 64—65〕の英語表現がある。

31）Ch.Kiefer の “Rapport Technique”（Annexe I, La Ceramique）は，Mundigak の報告書中のものである。しかし Kiefer の概念と本文の土器の説明とは必ずしも一致しない。本文では “fait au tour” と “fait à la main” の区別が行なわれている。

いえば個々別々に進んだものであろう。ロクロの使用はBaluchistanが早く，MR V期かVI期の初め，およそ前3000年ころに遡る。

(2)インダス平原北部文化とコト=ディジ式土器および前期ハラッパー式土器との間には，器種構成のほか，多くの面で隔絶がある。そこで，ここでは後2者とBaluchistanとの比較をすると，この2者においては削り工程のみでのロクロの使用期が認められない。これはBaluchistanとの大きな相違である。Baluchistanでは南西部で最後に現れるクッリ式土器も同じく，削り工程のみでのロクロ使用期がない。しかしこの土器にはハラッパー式土器の影響が推測でき，時期的にも他とは別に考えたい。コト=ディジ式土器はロクロ使用の開始がBaluchistanより早いことはあっても遅くはならない。

(3)インダス平原とBaluchistanの土器とは，形づくりにおいては系譜を異にする。ハラッパー文化に対する「西方文化の影響」をいうにしても，土器においてBaluchistanがその技術伝播を行なってはいない。

V Baluchistanとインダス平原との接触

形づくりの伝統の異なる2地域がどう接触していくのか，最後に少し述べたい。

まずコト=ディジ式土器は，インダス平原西縁部において，Baluchistanの文様をとりいれた地方的土器[32]を生じた。この土器はGumla II—III期とRahman Dheri I—III期に見出せる。いずれもコト=ディジ式土器の一般的性格はそのままで，文様のみがクエタ式土器やラナ=グンダイ式多彩文土器と共通する土器があり，次第にコト=ディジ式土器固有のものに整理されていく。Gumla II期の鍔付壺はコト=ディジ式土器の中では遅く現れるものであり，文様はMR VI期以降のものである。これにより，コト=ディジ式土器の拡大と考える。

コト=ディジ式土器はMughalによると中・北部Baluchistanのいくつかの遺跡で見出され〔MUGHAL 1970 : 74〕，MRにも出土例がある〔JARRIGE and LECHEVALLIER 1979 : 530〕。これらは搬入品と考えてよいだろう。

前期ハラッパー式土器のBaluchistanでの出土例はほとんどない。しかし，NausharoではMR VII期の遺物とハラッパー文化の遺物が表面採集品の大半を占め〔JARRIGE and LECHEVALLIER 1979 : 528〕，2地域の遺物の共伴例となりうるのが興味深い。

---

32) コト=ディジ式土器の地域差，たとえば中・北部での凹線文をもつ土器等の存在は，ここでいう地方的土器と意味が異なる。

逆に Baluchistan からインダス平原へとはいりこんだ遺物としては，Mohenjo–daro 下層出土の "wet ware"〔MACKAY 1938, Vol. II ,Pl. LXVII,nos. 1， 2〕や "reserved slip ware"〔同上 Pl.LXVII. nos. 3， 4〕，Chanhu–daro 出土の "reserved slip ware"〔MACKAY 1943, Pl.XXXVIII—26, 27, 29〕および Harappa 城塞下出土の彩文土器〔WHELLER 1947, Pl.XL II — 9 a〕がある。アムリ式土器やナール式土器とコト=ディジ式土器や前期ハラッパー式土器との共存も見逃せない。この中で注目したいのは，前期ハラッパー式土器では，コト=ディジ式土器のような地方的・混成的土器を生じなかったことである。後には，Baluchistan の遺跡の多くは放棄されて，少数の拠点的なハラッパー文化の居住地[33]が営まれるようになるが，それより前の Baluchistan でのハラッパー人の活動を物語る証拠は乏しい。

インダス平原との接触に比べると，Baluchistan がその西や北の地域ともっていた物質交流ははるかに多くの証拠がある〔JARRIGE and LECHEVALLIER 1979 : 503, GUPTA 1979 Vol. II : 122—132他〕。遺物の種類も多い[34]。土器では彩文土器の文様のほかに，隆線で表わす蛇文がイランに共通する[35]。

インダス平原と Baluchistan をひとつの地域として把握する試みは，Mughal の一連の著作に著わされているが，彼の文化段階論は個々の文化と遺物の差異を見ず，すべて単一化してしまう点に問題がある。ただ，Mughal と同じく文化現象面に目を転ずれば，MR VI期以降の動植物文の盛行は強調したいことである。S–iS でも文様要素としての動物文や植物文はあるが，フリーズとなったり幾何学文の間に配したりする場合がほとんどであり〔PRACCHIA 1984〕，前期ハラッパー式土器や MR の土器とは構成を異にする。他の土器でも，動植物の表現はイランに比べるとより写実的である。ピッパル（インド菩提樹）や魚，水草のような文様要素には，インド亜大陸固有の文様の現れが認められる。これらは中期以降のハラッパー文化へと続いていく要素である。

33）Gumla, Rana Ghundai, Kirta, Pathani Damb, Gudri 等。他に Nindowari 南西部の遺跡がある。

34）ラピス=ラズリ，トルコ石，双渦文の飾り付青銅製ピン，葉形の石鏃，区画文の印章が MR で出土した。石鏃・区画文の印章は他遺跡にも多い。

35）MR VI期以降，Anjira III期以降，Nal，Kulli，Tepe Yahya IV B 期，Mundigak のほか，アラビア半島にもある。

Ⅵ 終わりに

本稿はBaluchistanの土器研究としては欠落していた「形づくり」の基礎的考察を試みたものであるが，「ロクロ使用」の概念の明白化で従来の“wheel made”と一括された土器の発達を大まかにではあるが把握できた。「形づくり」の発達の相違からハラッパー文化との系譜の違いを示し，同時にBaluchistanの独自性が示された。

ここで試みた研究は，土器の分類，文化区分の再検討のための基礎作業として，さらに進める必要があろう。また，土器における「形づくり」と文様とは，同一レヴェルでは扱えぬことにも注意を換起したい。

謝辞 本稿の執筆に際しては次の諸機関と人々に便宜を計っていただき，教わるところが大きかった。末尾ながら深く感謝を記す。

インド政府考古局，パキスタン政府考古局，ペシャワール大学，京都大学人文科学研究所，M.Rafique Mughal, Farzand Ali Durrani, Michael Jansen, Monique Lechevallier, Jean–François Jarrige，小野山節，桑山正進，小西正捷，小西則子，常木晃，林巳奈夫，樋口隆康

参考文献・略号

AnthP Anthropological Papers of the American Museum of Natural History

Arch Archaeology

SAA South Asian Archaeology

AGRAWAL,D.P.

1982 *The Archaeology of India*, London and Malmö.

ALLCHIN,B. and R.

1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*, Cambridge.

ALLCHIN,R. et al.

1981 The Bannu Basin Project (1977—79) a Preliminary Report, in H. Hartel (ed.) *SAA*, 1979, Berlin.

ALLCHIN,R. and Knox,J.R.

1981 Preliminary Report on the Excavations at Lewan (1977—78), *SAA*, 1979.

AMIET,P.

1979 Archaeological Discontinuity and Ethnic Duality in Elam, *Antiquity*, 53 (209).

AUDOUZE,F. and JARRIGE,C.

1977 A Third Millennium Pottery–Firing Structure at Mehrgarh and its Economic Implications, in M. Teddei (ed.) *SAA*, 1977, Naples.

BISCIONE,R.

1973 Dynamics of an Early South Asian Urbanization : the First Period of Shahr–i Sokhta and its Connections with Southern Turkmenia, in N.Hammond (ed.) *SAA*, 1971, London.

1984 Baluchistan Presence in the Ceramic Assemblage of Period I at Shahr–i Sokhta, in B.Allchin (ed.) *SAA*, 1981, London.

BISCIONE, R. et al.

1974 Archaeological Discoveries and Methodological Problems in the Excavations of Shahr–i Sokhta, Sistan, in J.E.van Lohuizen–de Leeuw and J.M.M. Ubaghs (ed.) *SAA*, 1973, Leiden.

DE CARDI,B.

1965 Excavations and Reconnaissance in Kalat, West Pakistan, *PA*, 2.

1970 Excavations at Bampur, a Third Millennium Settlement in Persian Baluchistan, 1966, *AnthP*, 51 (2).

CASAL.J.–M.

1961 Fouilles de Mundigak, *MDAFA*, 17.

1964 *Fouilles d'Amri* (publication de la comission des fouilles archéologiques, Fouilles du Pakistan), Paris.

1966 Nindowari a Chalcolithic Site in South Baluchistan, *PA*, 3.

CHILDE,V.G.

1962 *A Short Introduction to Archaeology*, Collier Books.

CUMMING,J. (ed.)

1939 *Revealing India's Past.* The India Society, London.

DALAL,K.F.

1981 RD 89 : a New Hakra Ware Site? *Man and Environment*, 5.

DALES,G.F.

1962 Harappan Outpost on the Makran Coast, *Antiquity*, 36.

1965 New Investigations at Mohenjo–daro, *Arch*, 18 (2).

1973 Archaeological and Rediocarbon Chronologies for Protohistoric South Asia, *SAA*, 1971.

1979 The Balakot Project : Summary of Four Years Excavations in Pakistan, *SAA*, 1977.

DANI,A.H.

1971 Excavation in Gomal Valley, *AP*, 5 (1970—71).

DEVA,K. and McCown,D.E.

1949 Further Exploration in Sind : 1938, *AI*, 5.

DICKERSON,J.

1974 *Pottery Making a Complete Guide*, New York.

DUPREE,L.

1963 Deh Morasi Ghundai : a Chalcolithic Site in South–Central Afghanistan, *AnthP*, 50 (2).

1964 Prehistoric Archaeological Surveys and Excavations in Afghanistan : 1959—60 and 1961—63,*Science*, 146.

DURRANI,F.A.

1981 Rahman Dheri and the Birth of Civilization in Pakistan, *Bulletin of the Institute of Archaeology*, University of London, 18.

ERICH,R.W.

1965 *Chronologies in Old World Archaeology*. Chicago and London.

FAIRSERVIS,W.A.

1956 Excavations in the Quetta Valley, West Pakistan, *AnthP*, 45 (2)

1959 Archaeological Surveys in Zhob and Loralai Districts, West Pakistan, *AnthP*, 47 (2).

1971 *The Roots of Ancient India*, New York.

GUPTA,S.P.

1979 *Archaeology of Soviet Central Asia and the Indian Borderlands*, Delhi.

HALIM,M.A.

1971-1972 Excavations at Sarai Khola (pt. 1&2), *PA*, 7–8.

HARGREAVES,H.

1929 Excavations in Baluchistan 1925, Sampur Mound, Mastung and Sohr Damb, Nal, *MASI*, 35, Culcutta.

JARRIGE,C.

1984 Terracotta Human Figurines from Nindowari, *SAA*, 1981.

JARRIGE,C. and TOSI,M.

1981 The Natural Resources of Mundigak, *SAA*, 1979.

JARRIGE,J.-F

1981 Economy and Society in the Early Chalcolithic/Bronze Age of Baluchistan : New Perspectives from Recent Excavations at Mehrgarh, *SAA*, 1979.

1984 Chronology of the Earlier Periods of the Great Indus as Seen from Mehrgarh, Pakistan, *SAA*, 1981.

JARRIGE,J.-F. and LECHEVALLIER,M.

1979 Excavations at Mehrgarh, Baluchistan : Their Significance in the Prehistoric Context of the Indo–Pakistani Borderlands, *SAA*, 1977.

加藤唐九郎編

1972 『原色陶器大辞典』, 淡交社

辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一

1980 『インダス文明 インド文化の源流をなすもの』, NHK ブックス375.

KHAN,F.A.

1965 Excavations at Kot Diji, *PA*, 2.

KHOL,Ph.L.

1977 A Note on Chlonite Artifacts from Shahr–i Sokhta, *EW*, 27 (1—4).

桑山正進

1966 バルチスタン考古記, 『東方学報』京都 37, 京都大学人文科学研究所.

小林行雄・佐原真

1964 『紫雲出』, 香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会, 第三章第一節「弥生式土器の製作技術」.

小西正捷

1981 M.R. ムガル『インダス文明の起源に関する新研究』とその形成期諸文化をめぐる概念規定, 『紀要』38, 法政大学教養部.

LAL,B.B.

1979 Kalibangan and the Indus Civilization, in Agrawal and Chakrabarti (eds), *Essays in Indian Protohistory.*

LAMBERG-KARLOVSKY,C.C.

1971 The Proto–Elamite Settlement at Tepe Yahya, *Iran*, 9.

1972 Trade Mechanisms in Indus–Mesopotamian Interrelations, *JAOS*, 92.

1978 The Proto–Elamites on the Iranian Plateau, *Antiquity*, 52 (205).

1982 Sumer, Elam and the Indus, Three Urban Processes Equal One Structure ?, in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization : a Contemporary Perspective*, New Delhi.

LAMBERG-KARLOVSKY,C.C. and TOSI,M.

1973 Shahr–i Sokhta and Tepe Yahya : Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau, *EW*, 23 (1—2).

LECHEVALLIER,M and Quivron,G.

1981 The Neolithic in Baluchistan : New Evidences from Mehrgarh, *SAA*, 1979.

MACKAY,E.J.H.

1930 Painted Pottery in Modern Sind : a Survival of an Ancient Industry, *JRAI*, 60.

1938 *Further Excavations at Mohenjo–daro*, New Delhi.

1943 *Chanhu–daro Excavations, 1935—36*, (American Oriental Series, Boston : Museum of Fine Arts, 20).

MAJUMDAR,N.G.

1934 Exploration in Sind, *MASI*, 48 Delhi.

MARSHALL,J.

1931 Mohenjo–daro and the Indus Civilization, London.

Массон, В.М.

1977 Алтын-Депе в Эпоху Энеолита, *Советская Археология,* 1977— 3 .

1981 *Алтын-Депе* (*Труды ЮТАКЭ* 18), Ленинград.

MASSON,V.M. and SARIANIDI,V.I.

1972 *Central Asia*, Thames and Hudson.

MASUDA,S.

1974 Excavations at Teppeh Sang–e Caxmaq, in F. Bagherzadeh (ed.), *Proceedings of the IInd Annual Symposium on Archaeological Research in Iran*, Tehran.

増田精一編

1977 『タペ=サンギチャハマック』, イラン先史遺跡調査団.

McCOWN,D.E.

1942 The Comparative Stratigraphy of Early Iran, *Studies in Ancient Oriental Civilization*, 23, Oriental Institute, University of Chicago.

MUGHAL,M.R.

1970 The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (c. 3000—2400 B.C.), Ann Arbor.

1973 *Present State of Research on the Indus Valley Civilization*, Department of Archaeology and Museums, Pakistan Government.

1974 a New Evidence of the Early Harappan Culture from Jalilpur, Pakistan, *Arch*, 27 (2).

1974 b Explorations in Northern Baluchistan, 1972 : New Evidence and Fresh Interpreta-

tion, in Bagherzadeh (ed.) *Proceedings of the IInd Annual Symposium on Archaeological Research in Iran*, Tehran.

1980 The Origins of The Indus Civilization, *The Sindhological Studies*, Summer 1980, University of Sind.

1982 Recent Archaeological Research in the Cholistan Desert, in G.L. Possehl (ed.) , *Harappan Civilization : a Contemporary Perspective*, New Delhi.

PIGGOTT,S.

1943 Dating the Hissar Sequence, the Indian Evidence, *Antiquity*, 13, (68).

1947 A New Prehistoric Ceramic from Baluchistan, *AI*, 3.

1950 *Prehistoric India*, Pelican Books.

PRACCHIA,S.

1984 Preliminary analysis of the Shahr–i Sokhta II Buff Ware Painted Figuration : Some Observations for a Systematic Classification, *SAA*, 1981.

ROSS,E.J.

1946 A Chalcolithic Site in Northern Baluchistan, *JNES*, 5 (4).

佐原真

1972 ロクロ—土器の話(9), 『考古学研究』 19, (1).

1979 ろくろ, 『世界考古学事典』, 平凡社.

SANTONI,M.

1984 Sibri and the South Cemetry of Mehrgarh : Third Millennium Connections between the Northern Kachi Plain (Pakistan) and Central Asia, *SAA*, 1981.

SHAFFER,J.G.

1978 *Prehistoric Baluchistan*, Delhi.

SHARMA,V.D.

1982 Harappan Complex on the Sutrej (India), In Possehl (ed.) *Harappan Civilization : a Contemporary Perspective*, New Delhi.

SHEPARD,A.O.

1971 *Ceramics for the Archaeologist* (7th print), Carnegie Institute of Washington.

宗臺秀明

1982 メヘルガール遺跡の表採遺物について, 『古代文化』, 34(3).

曽野寿彦

1973 『西アジアの初期農耕文化』, 山川出版.

STEIN,M.A.

1929 An Archaeological Tour in Waziristan and Northern Baluchistan, *MASI*, 37, New Delhi.

1931 An Archaeologicol Tour in Gedrosia. *MASI*, 43, New Delhi.

THAPER,B.K.

1969 The Pre–Harappan Pottery of Kalibangan–an Appraisal of its Interrelationship, in *Potteries in Ancient India*, Patna.

TOSI,M.

1968 Excavations at Shahr–i Sokhta, a Chalcolithic Settlement in the Iranian Sistan, Preliminary Report on the First Compaign, October–December 1967, *EW*, 18 (1—2).

1969 Excavations at Shahr–i Sokhta, Preliminary Report on the Second Campaign, September–December 1968, *EW*, 19 (3—4).

1974 Bampur : a Problem of Isolation, *EW*, 24 (1—2).

VATS,M.S.

1941 *Excavations at Harappa*, Delhi.

VIDAL,M.

1984 The Pear–shaped Beaker of Shahr–i Sokhta : Evolution of a Ceramic Morphotype During the Third Millennium B.C., *SAA*, 1981.

WHEELER,R.E.M.

1947 Harappa 1946 : the Defences and Cemetry R 37, *AI*, 3.

1953 *The Indus Civilization* (Supplementary Volume of the Cambridge History of India), Cambridge.

1968 *The Indus Civilization* (3rd ed.), Cambridge.

WRIGHT,H.T. anb JOHNSON, G.A.

1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran, *AmAnth*, 77 (2).

Хлопин, И.Н.

1963 Оенаментальный Геоксюрский Крест, *Краткие Сооъшения Института Археологии,* 108.

1968 *Памятники Развитого Энеолита Юго-Восточной Туркмении,* Ленинград.

横山浩一

1959 手工業生産の発展　土師器と須恵器,『世界考古学大系』3（日本Ⅲ），平凡社.